

〔年中行事歌合〕二十五番 右 季御讀經○中略

右は季御讀經として、大磐若經を、春秋百敷にて講せられ侍るにや、引茶として僧に茶を給也、されば茶は昔よりおほやけのもてなしものにて有ければ、大内にも茶園など侍なり、中比梅尾の何の上人とやらん茶の種を樹たるよしなど申は、ひが事にて侍るにこそ、

〔海人藻芥〕茶者自上古我朝ニアリ、挽茶節會トテ、於内裏被行公事儀式、

〔嬉遊笑覽十下〕橘嘉樹云、公事根源御讀經の度ごと、第二日には、行茶として、僧に茶を給ふ事あり、藏人式江家次第誤云、天喜四年、三箇日、每夕座、侍臣施煎茶衆僧相加甘葛煎亦厚朴生薑等隨要施之云々、是は全く煎茶なり、然るを行茶を引茶と誤り、引を挽に作り、海人藻芥には書たるやうなり、

〔木芽説〕あるふみに、いにしへおほやけに、ひき茶の節會としておこなはる、公事ありしと云るけれど、ことさらにさる節會あらば、いにしへふみどもに、かならず其程のとかくのさだめども見えぬべきを、さもあらぬは、かの春秋の御讀經にひき茶とてたまふ式有けるを、其事たえてのちの世に聞ひがめつるつたへなるべし、

〔北山抄十二〕十九日御佛名事

同曆○天 九年十二月廿二日、寅刻左大臣參入、入道親王實 依召參候○中略 賜法親王祿、紅染細長一襲御衣、櫻色綾細長一襲、茶并茶具二襲付五葉枝

〔玉海〕承安五年○元年 七月四日癸未、未刻藏人右衛門權佐光雅來○中略 此次光雅語云、御賀事○白河

五十 去四月比奉可奉行之仰、先是中宮大夫隆季上、以左中弁長方等承仰云々、今度偏被康和○河御 賀例云々○中略 煎茶具任康和例可被調之仁平無之、而彼度物具等被求鳥羽御倉之處、已以紛失、仍今度

開仁和寺圓堂、取出其具等、可爲本樣云々康和如此